

献呈の辞

春寒次第にゆるみ、早くも花の便りが聞かれる季節となりました。専修大学文学部では、来る三月末日をもって、日本語学専攻の鈴木丹士郎教授が定年を迎えられ、退職されることになりました。

鈴木丹士郎先生は、日に日に戦時色が強まる昭和十三年二月に、新潟県三条市にお生まれになりました。地元の小学校・中学校を卒業され、昭和三十一年に新潟県立三条高等学校を卒業されると、新潟大学の教育学部に進まれました。学研一筋の先生が教育学部のご出身とは意外な感じもいたしますが、学生に対する穏やかななかにも妥協を許さない稟とした指導姿勢を拝見いたしますと、ここに先生の教育者としての原点を見る思いが致します。

新潟大学を卒業されると、昭和三十七年に東北大学大学院文学研究科修士課程に進まれ、博士課程を修了されるなかで国語学研究の基礎を確立されました。

先生の学問領域については、遺憾ながら浅学ゆえに論評する能力も資格も持ち合わせておりません。しかしその膨大な研究に接して感じられることは、日本文学をこよなく愛されるところに、それとの共生関係のなかに鈴木国語学とでもいうべき独自の領域を築いてこられたのではないかと思われれます。数年前になりますが、神田の古書店で絶版間もない先生の御著を手にし、その高値に驚いたことがあります。先生の研究が後進の研究者の目標としてこれ程切望されているとは思いませんでした。

あらためて先生の学問の世界における存在の大きさを知った次第です。また先生は『三省堂 古語辞典』をはじめ多くの辞書類を執筆されています。必要があつて先生ご執筆の項を拝見したことがあります。お人柄そのままに厳密な反面、簡潔で解りやすい内容となつており、言葉というものへの先生の取り組みに少しでも触れえたような気が致しました。

先生は東北大学大学院博士課程を修了されると同時に、専修大学の商学部にて専任講師として就任され、昭和四十三年には設置間もない文学部に移られました。経済学部・法学部にはじまった本学にとって、文学部の創設は専修大学のルネッサンスとでもいうべき壮舉でありました。その文学部において鈴木先生は気鋭の国語学者として、自らの研究・教育活動を開始されました。爾来、四十三年、文字通り文学部の柱石として学部の研究教育を支えるとともに、教員の待遇改善やカリキュラムの充実、そして平成二年から二期四年にわたつて文学部長をつとめられ、平成十五年からやはり二期四年にわたつて大学院文学研究科長をつとめてこられました。先生の学部・大学院の運営は、決して原案を押し付けることなく、若い先生方の意見にもじつと耳を傾け、確実な着地点を探るという手法を採られていたように思われます。それだけに先生ご自身の気苦労やストレスは大変なものであつたと思われまふ。最愛の奥様を亡くされたのも、この学部長在任中のことでした。ご葬儀に参加させて頂きました。人生経験の乏しい私などにはお慰めする言葉も見当たりませんでした。

大学は今大きな転換期を迎えようとしています。このような重要な時期に鈴木丹士郎先生が大学を去られ、ご助言をいただけなくなるのは、かえすがえすも口惜しく残念でなりません。しかしこれも

定めてございます。先生のますますのご発展とご健勝を祈念して献呈の言葉といたします。

梅の花咲ける岡辺に家居れば乏しくもあらず鶯の声（万葉集1824）

二〇〇八年三月

専修大学文学部長 矢野 建 一
